新所沢パルコ産姉妹

小森谷みや

新所沢パルコ閉店まで二ケ月を切った大晦日の夜。世間では大掃除を終え、家族で音楽番組でも流しながらまったり蕎麦を啜り、新年を迎えるまでのカウントダウンをのんびりと待つ。そんな時分に所沢市緑町の某所では、パルコを愛してやまないとある三姉妹が、まったりものんびりもできないまま年を越そうとしていた。

「年を越したらパルコが閉まる！」

「いや！！！」

「いやまだ二ケ月はあるでしょう」

長女の悲痛な叫びに次女の共鳴。三女は冷静に突っ込むものの、その声には寂しさが滲む。上から順に、二十九、二十七、二十五。つまり三十路に着々と歩を進めているこの三姉妹の生活の中心には、物心ついた頃から新所沢パルコがあった。三人ともが成人し、家を出て行った今も、ここ新所沢の利便性を重宝した彼女らの両親はこの土地を離れない。

三姉妹は、それぞれ家庭を持たない身軽さを利用して、毎年新所沢に集まって一年を終えるのだ。

「我らが両親は、家族向けのお店がたくさん入った新所沢パルコに、おはようからおやすみまで頼り切る事を前提に、この新所沢という土地に移り住んだのに！」

「私たち、その恩恵にあやかりまくって立派な大人になったんだもんね。わが両親ながら、ナイス判断」

「…… その両親、パルコさよならイヤーを迎える前に寝落ちてますけど」

「二人とも還暦越えだもの、仕方ない」

「明日早起きして二日の初売りの計画立てる気じゃない？」

両親というストッパーを失った三人に、新所沢パルコへの想いを止めることなど不可能だった。

「私、初めて福袋買ってもらったのパルコだったなあ。お姉ちゃんたちが連れてってくれて」

女はコタツの中で姉たちの足をつつきながら言った。三姉妹の家では、毎年一月二日はパルコ！という年が多かった。

「小学生のあんた連れてくのにほんとちょうどよかったんだよね、パルコ。都心に出ずともちょっとおしゃれな雑貨とか服とか買えるんだもん」

「年明け、女子の持ち物が何人か福袋被りしてたなあ」

「わかるわ、みんな考えること同じ！」

「みーんなパルコ行くからさ、冬休みでしばらく会えないはずの好きな子とかが親と歩いてたりして」

「それめっちゃ嬉しいけど恥ずかしいやつ！こっちも身内といるととくに」

「パルコ行くとさ。好きな人の学校とは違う姿が見られるって、中学生の私の中で話題になってたな」
　次女のその言葉に長女と三女が色めき立つ。幾つになっても恋話となると熱くなる三人だ。みかんを剥きつつ、頬張りつつ、三姉妹はパルコでの甘酸っぱい思い出話に花を咲かせる。ちなみに、このみかんもパルコで三姉妹の母が買ってきたものだ。キッチンランドのフルーツは、パルコに他の用で来たときも、地下に潜ってすぐに誘惑してくるのでまんまと買ってしまう。試食をやってた頃は特に。
「私さ、中学の時に同級生の生徒会長と付き合ってたんだよね」
「げ、ませてやがる」
「え、普通じゃない？初めての恋人は中学生の頃って人多いでしょ」
「まじ？二歳差のジェネレーションギャップ？」
「で、休みの日に二人でシネパークに映画観に行って。作品は彼が好きな小説原作だったから、映画に向かうまで、ラブラブってよりは本気で映画を楽しみにしてる雰囲気だったのよね。でも、そんな真面目な彼が好きだったから、道すがら手を繋げないこととか気にしないようにしてたの」
「と言いつつほんとは繋ぎたかったんだね、お姉ちゃん」
「みかんより甘酸っぱいな、妹よ」
　揶揄う二人に向かってみかんの皮でジューシーな汁を飛ばしつつ、次女の話は続く。
「で、映画を楽しんでロビーに出て、パルコ館のファストフード屋で感想でも話したいなってエレベーターを待っていたら、クラスの男子たちに遭遇して」
「ああ中学生カップルには厳しい局面」
「ここで堂々としてくれる恋人求む。アラサーだけど」
「当時の私、なんかすっごく恥ずかしくなっちゃって。男子たちはしつこくからかってくるけどなかなかエレベーターは来ない。彼には申し訳ないけどこの場から逃げ出したくなっちゃって」
「シネパークってエスカレーター通じてないからね」
「三階まで降りられれば、パルコ館に渡って男子たちを巻く方法もまだありそうなもんだけど」
「二人とも脳内館内マップ完璧だね。私もだけど。……それで、嫌だなって思ってたその時、普段は真面目でクールな彼が急に私の手を掴んでこっち！ってエレベーターとは逆方向に引っ張ったの」
「その方向は」
「まさか」
「「階段！？」」
　きゃー！と二人から歓声が上がる。今宵はお酒も入っているため、テンションは上がる一方。三姉妹宅のコタツのボルテージは最高潮だ。

ところで、三姉妹と違って新所沢パルコを熟知していない人がこの会話を聞いても、きっと何のことやらとなるだろう。新所沢パルコ・レッツ館四階にある映画館シネパークには、エレベーターのある真反対、やや奥まったところに階下への階段があるのだ。もちろん映画館に向かう通路として階段を使う人もいるだろうが、三姉妹にとってその階段は、エレベーターがちょっと混んでいたくらいでは使わない、忘れられた階段だったのだ。
「私の方を振り向かずに、『ちょっと走るよ！』って声だけかけて。階段を三階まで駆け降りて、レッツ館からパルコ館への渡り廊下を駆け抜け、最初のエスカレーターはスルー。二つ目のエスカレーター― で二階へおり、二階でまたショップの間を走り抜けて。駅まで最短で導いてくれる斜めのエスカレーターに飛び乗り、一階にたどり着いてパッと外にでた。そこでようやく彼が振り向いて、イタズラっぽい笑顔でこう言ったの」
長女と三女の瞳は子どもの頃のように輝いている。
「ちょっと楽しかったね、って」
「「キっーッ！！」」
年明けまであと三十分を切っている。深夜にふさわしくない二人の黄色い悲鳴を慌てて沈めつつ次女は続けた。
「中学生の私はさ、真面目な彼がダッシュで私を連れて逃げるそのギャップと、二棟に分かれている新所沢パルコの館内マップを熟知して案内してくれたスマートさにやられたってわけ」
「そりゃやられるわ」
「お姉ちゃんとパルコにそんな甘酸っぱい想い出があったとは」
「いやそれだと私とパルコが付き合ってたみたいになるから」
何年も忘れていた青い思い出に恥ずかしくなった次女は、とっくに麺を食べ終わり、残しておいた年越しそばのつゆをすすった。すっかり冷めていたが、ヒートアップした体にはちょうどよかった。
「でも実際、パルコはもう恋人、いや恋人越えだよ……」
「産まれも育ちも新所沢パルコ、みたいなとこある」
しみじみとするした二人に、長女が言う。
「幼稚園、初めてお弁当セットを買ったのは？」
「「パルコ！」」
次女も続く。
「小学生、新学期に必要な雑巾二枚の存在を忘れてて前日夜に母に怒られながら、閉店滑り込みセーフしたのは？」
「「パルコ」」
三女は長い。
「中学生、お姉ちゃんたちにパシられて父の日のプレゼント買いに行ったらまさかの父本人にパルコ内で遭遇。お姉ちゃんたちに頼まれたことを吐かされ、かわいそうにと何故か私

が一階のカフェでご馳走になる事件が起きたのは？」
「なにそれ知らないそんなことあったの！？」
「パルコって答え言ってますやん」
パルコでの思い出は？なんて聞かれようもんなら、いくらでも湧いてくるのだ。それだけ、ずっとそばにあった。高校生で初めてルーズリーフを買ったのも、大学の入学式で履くパンプスを買ったのも、仕事帰りに駅を出て吸い込まれるように入店し、ダラダラとウィンドウショッピングをしたのも、新所沢パルコなのだ。きっと、もうすぐお正月を迎えようとするこの町に住む人の多くに、新所沢パルコとの思い出がある。
「母！パルコは私たちの母だよ！」
三姉妹の中で最も泣き上戸な長女が突然立ち上がり叫ぶ。
「パルコに産まれ、パルコに育った私たち、パルコ産の姉妹だよ！」
「お姉ちゃん、結構飲んだ？」
「パルコへの愛がおかしな方向に行ってる」
「うるさい！どうせ実母の名前だって春子（ハルコ）なんだ、どっちだって変わんない！」
「いや変わるだろ！」
「実母泣くぞ！」
「けどまあパルコ産姉妹なのは確かに納得！」
「語呂もいいし！」
「私たちパルコ産姉妹はー！」
年明けまであと十数秒。テンションが迷子になった姉妹の中心で長女は宣誓する。
「年が明け、閉店までの残り二ケ月をパルコとの思い出に浸りながら過ごし、その時をしかと見届けると誓います！」
「「おおおおお！！」」
謎の拍手が起こり、テレビ中継から除夜の鐘の音が響いた。こんなにも謎の拍手喝采は、シネパークで「埼玉県人映画」が投影された時以来だろう。
もうすぐお別れとはいえ、今だけは、彼女たちの愛を受け止めてくれ。
私たちの、思い出でいっぱいの、新所沢パルコよ